

【Meeting Room 8】パネル4

東南アジアにおける宗教文献研究の意味とその将来性

「在泰京越南寺院景福寺所蔵漢籍字喃本」調査結果を通じて

代表：大野 美紀子

(京都大学)

東南アジア地域研究研究所に保管されている漢喃仏經典等資料は、故桜井由躬雄氏によってバンコクのベトナム仏教寺院景福寺で「発見」され、1979年日本に紹介された。本企画は、当該「景福寺資料群」（仮称）について、40年近くを経て実施されたアジア史資料学、仏教学、言語学、そして地域研究の各分野から最新の文献研究手法による調査結果を報告し、東南アジア研究における宗教文献研究の可能性と将来性を示唆するものである。パネル構成は、趣旨説明として1.「在泰京越南寺院景福寺所蔵漢籍字喃本目録」資料の概要と経緯を説明し、続いて2.当該資料の招来元となる景福寺についてフィールド及びタイ語文献による調査結果（Thanyathip Sripana、西田昌之和訳）、3.当該資料群の中の仏經典テキストについて仏教学と字喃文字研究（亀山隆彦、清水政明）4.当該資料群がオリジナルである有意性に基づく料紙調査の分析結果（小島浩之・矢野正隆）を報告する。報告では、70年代末から現在までの間において、東南アジア地域内における東南アジア研究の発展と、東アジアにおける文献研究手法の東南アジア研究への応用による共同調査結果であり、当該資料が19世紀後半から20世紀半ばにかけて在タイ越僑・華僑に関係する重要資料であることを明示する。併せて、文献資料のデジタル化が優勢な中でオリジナル資料調査がもつ研究可能性と、フィールドベース研究が困難な今般の情勢下で他分野との共同研究推進により、日本国内に埋もれている東南アジア地域文献のさらなる利活用を模索することを提起する。

構成

司会・趣旨説明：大野美紀子（京都大学）

第1報告：Thanyathip Sripana（Chulalongkorn 大学）・西田昌之代理報告（国際基督教大学）

「ワット・サマナーナムボーリハーン（在泰京越南寺院景福寺）の発展におけるベトナム移民の関与について」

第2報告：亀山隆彦（龍谷大学）

「景福寺所蔵の仏伝資料の系譜と宗教的機能：合綴本「釈氏国音」を中心に」

第3報告：小島浩之・矢野正隆（東京大学）

「料紙調査からみた「在泰京越南寺院景福寺所蔵漢籍字喃本」の基礎的考察」

第4報告：清水政明（大阪大学）

「漢字・字喃対訳版『佛説天地八陽經』所収字喃の方言的特徴について」

コメンテーター：武内房司（学習院大学）、芹澤知広（天理大学）、岩月純一（東京大学）

【Meeting Room 8】 パネル4

ワット・サマナーナムボーリハーン（在泰京越南寺院景福寺）の発展におけるベトナム移民の関与について

タンヤーティップ・シーパナー

（チュラーロンコーン大学・シニアリサーチャー）

代理発表 西田 昌之

（国際基督教大学・研究員）

ワット・サマナーナムボーリハーン（在泰京越南寺院景福寺、以下景福寺）は、タイ国内のベトナム大乘仏教宗派である安南派（アンナムニカーイ）に所属する二十二寺院の一つである。ベトナム語名称は *Chùa Cảnh Phước* という。バンコク都内のパドゥン・クルンガセーム運河沿いにあり、かつて近隣にベトナム人集落があったことで知られる。本発表は、2020 年に行った景福寺及び周辺地域への現地調査を基に景福寺の建立およびその発展におけるベトナム移民の関与について論じる。

まず安南派はトンブリー王朝期からラッタナコーシン王朝初期にベトナム移民の手によってベトナムからシャムに移入された大乘仏教宗派である。トンブリー王朝期（1767-1782）にベトナム仏教僧を招いて最初の寺院を建立し、ラーマ五世期（1868 - 1910）になって中国派とともに大乘仏教宗派として公認された。

景福寺はラーマ三世期（1824-1851）にベトナム移民の手によって僧堂として建設が始められた。ラーマ四世期（1851-1868）には、カーンチャナブリーの砦の防衛の任務からバンコクに帰還したベトナム人たちと合流して本格的な寺院建設を行った。またシャム歴代国王からも寺院は篤い支援を受けた。特にラーマ四世は寺院建設に協力して布薩堂を寄進し、続くラーマ五世もまた手厚い庇護を与えて、本寺院にタイ語名「サマナーナムボーリハーン」を下賜し、自ら住職を任命した。

その後、第三代安南派僧団長兼景福寺住職のチールップ（1833-1902）、シャムの官僚として活躍した運河局局長プラチョンラターンウィニットチャイやベトナム人大砲砲兵義勇部隊隊長クンアンナムカームボーリラックがベトナム人集落の取りまとめ役となり、寺院の発展に寄与した。

しかし、インドシナ戦争の激化に伴って、タイ国内のベトナム人たちに対するタイ政府の監視が強まると景福寺周辺からベトナム人住民は離散した。そのために現在ベトナム人集落は残っていない。しかし、かつての景福寺とベトナム人古集落との密接な関係を示す痕跡はいまも残っている。布薩堂裏の仏足石堂（モントップ）には、ベトナム人たちの遺骨と遺灰が納められている。また今日でもタイ国内のベトナム系タイ人やベトナム移民たちが時折寺院を訪ねて来るのである。

【Meeting Room 8】パネル4

景福寺所蔵の仏伝資料の系譜と宗教的機能 合綴本「釈氏国音」を中心に

亀山 隆彦

(龍谷大学世界仏教文化研究センター・研究員)

バンコク市内に建造されたベトナム系仏教寺院、景福寺 (Wat Samananam Borihan) には、漢文と字喃で書かれた多数の仏典 (以下、景福寺資料) が伝えられる。それら景福寺資料は、中国やベトナム系移民を通じてタイに持ち込まれた東アジア仏教の伝統、つまり、漢字文化圏で形成された禅や浄土教といった大乘仏教の東南アジアにおける広がりを考える上で、非常に重要な資料といえる。

そのような景福寺資料だが、一部が、現在京都大学東南アジア地域研究研究所 (CSEAS) に厳重に保管され、詳細な調査が継続される。本発表では、この CSEAS における調査と先行研究の成果に基づいて、景福寺資料の特質を考察すると共に、それらが寺院にあった時、どういった宗教的意義を担ったか分析を進める。

議論の主題に関して、もう少し詳しく述べておくと、数ある景福寺資料の中でも『釈氏源流』『釈氏国音』『釈氏源流演訳国音』等と呼ばれる「仏伝」に関連する文献に注目し、テキストの基本的な構造を詳しく確認した上で、それらが景福寺の宗教実践の中で果たした役割について考察を試みる。

景福寺資料の悉皆調査を実施した桜井由躬雄氏によると、景福寺の書架には、漢字と字喃が混在する『釈氏源流』関連資料が、計十種所蔵されていた。そして、その中の三種を除く全典籍が、現在 CSEAS に保管され、綿密な調査が実施される。

その調査の成果として、現時点で次の二つの事実が指摘される。①『釈氏源流』に関連する資料の中には、桜井氏の調査が及ばなかった典籍が含まれる。②それら資料の一部には、景福寺資料そのものの形成を考える上で重要な情報、典籍の印刷と流通に関わったと思われる人々の名前が記載される。

本発表の内容は、これら成果の内の①の延長線上に位置づけられる。すなわち CSEAS の調査を通じて、従来の資料に加えて「戒殺放生文」との合綴本「釈氏国音」の存在が明らかになった。発表では、この合綴本「釈氏国音」を焦点として、景福寺に所蔵される仏伝資料を構造と内容の両面から検討し、特に「釈氏国音」と名づけられる一群の資料の系譜、および宗教的機能を解明する。具体的な論点としては、小峯和明氏の研究の中で示唆された景福寺の仏教儀礼と典籍の結びつきを論証するつもりである。

また、以上の発表内容は、仏教学の観点から景福寺資料を検討し、資料の系譜と思想的意義を明らかにする試みとも位置付けられる。

【Meeting Room 8】パネル4

料紙調査からみた「在泰京越南寺院景福寺所蔵漢籍字喃本」の基礎的考察

小島 浩之・矢野 正隆
(東京大学)

本報告は、京都大学東南アジア地域研究研究所所蔵の「在泰京越南寺院景福寺所蔵漢籍字喃本」105点110件の料紙について、近年、日本古文書学において提唱されている、外形・表面観察、形状測定、光学観察・測定（非破壊観察）による手法に倣って調査を行い、初歩的な考察を試みたものである。この方法は、文書料紙について、目で見ると手で触るなど、調査者の感覚機能により観察し、法量・重量・厚みなど料紙の物理量を測った上で、顕微鏡やカメラなどの各種光学機器を利用した観察・測定データを加味して、定量的に分析するもので、調査者の感覚からの主観的データと、物理量や光学観察・測定の記録という客観的データを相互に突き合わせて定量化しようとする点に特徴がある。今回の調査では、資料の物理量を計測機器を用いて測定し、据え置き型の顕微鏡を用いて料紙の構成繊維・填料（添加物）・サイジングなどの物理的痕跡を観察し、目視により簀目・素地目・糸目・張痕・刷毛目といった抄紙時の物理的痕跡を確認・記録することを研究の出発点とした。こうして得られたデータを総合的に検討し、以下のような結論を得た。

このコレクションの料紙を構成する繊維は木材パルプ・竹・楮である。碎木パルプが実用化されたのは1854年であり、アジアへの伝播は19世紀末とされている上、東南アジアでは竹パルプの使用が主流であったことから、パルプ含有紙（全体の約45%）は少なくとも19世紀末以降のもので、欧州もしくは日本・中国などからの輸入紙の可能性が高いと考えられる。これらを考慮の上で、たとえばパルプ混入紙である『新刻万法帰宗卷五』（資料番号043）や、『釈迦如来応化事蹟』（資料番号106）についてみると、前者の乙未年は1895年と推定される一方、後者の序は「嘉慶戊辰」（1808）とあって、これはパルプ実用化前のため、料紙の年代がこれより後となるから、後世の覆刻本である可能性が高いことがわかる。

一方、パルプを含まない竹紙・楮紙はそれ以前に遡る可能性を持つ。紙の使い分けという点からみると、中国では刊本に使われる傾向の強い竹紙も、このコレクションでは広く鈔本にも使われている。また、前近代の中国産竹紙の特徴の一つとして、一寸あたりの簀目数が40本を超えることが指摘されているものの、当該コレクションの鈔本に使われる竹紙は、簀目数が30本前後のものが多数を占める。これらは文献の内容分析からだけでは読み取りようのない事実であり、料紙調査が資料から得られる情報の範囲を拡張した結果だと言える。こういったモノとしての資料情報を蓄積し活用できれば、地域研究や歴史研究の成果を今より具体的で細密なものとする可能性があるばかりか、東南アジア資料の保存管理のためのエビデンスとしても大いに役立つであろう。

漢字・字喃対訳版『佛説天地八陽經』所収字喃の方言的特徴について

清水 政明

(大阪大学)

本報告は、故桜井由躬雄氏が在タイベトナム寺院景福寺から請来した漢籍字喃本類に含まれる漢字・字喃対訳版『佛説天地八陽經』に見られる字喃の方言的特徴を音韻（及び語彙）的側面から分析し、その表音要素の選択が、ベトナム中部から南部にかけの方言に基づいて行われた可能性を指摘するものである。それは、(1)当該經典に字喃訳文を付した人物が、中部から南部にかけての地域出身者であったこと、(2)字喃の地域的差異に注目し、特に南部出身の作家による作品に見られる特徴的な字喃を収集した資料として『南部字喃索引』(Vũ Văn Kính 1994)が知られるが、そこに引用された『蓼雲仙』、『楊慈何茂』、『阮友勳小傳』、『金石奇縁』、『漁樵問答』等の著名な文学作品に加え、本經典を含む資料群が方言字喃の重要なデータを提供する資料である可能性を示唆する。

『在泰京越南寺院景福寺所蔵漢籍字喃本目録』(桜井 1979)の中で、「天地八陽經」の名を冠した仏典が 8 種見える。全タイトル百数点に占める割合から見ても、この仏典が当時広範に利用された形跡が窺える。「Thiên(天)」の項目に紹介された 8 種のうち、「2. (佛説)天地八陽經 手写本(M)」及び「7. (佛説)天地八陽經 手写本(M)」が字喃対訳本である。本発表では後者を底本とし、前者を参照しながら、所収字喃のべ約 4,500 字のローマ字転写作業を行った。本資料末尾に記された干支年(乙酉年)、テキストに含まれる避諱文字(時→辰、實→寔)、料紙(竹紙)、各種ローマ字転写テキストの出版年(1922, 1932, 1937, 1938)から、本經典が 19 世紀に筆写された可能性を指摘する。そして、各字喃の読音と表音部のベトナム漢字音の対応関係を分析し、その特徴を通時的・共時的側面から考察した結果、ローマ字資料において 19 世紀まで存続したと指摘される語頭子音連続 ml-を示す例が見出された他、典型的な南部字喃の特徴である語末子音-n/t と-ŋ/k の対応関係を示す例が 10 例見出された。一方、1980 年代の方言調査に基づく Hoàng Thị Châu (2004)及び筆者らの方言調査(Shimizu 2014, 他)の結果、及び既存の方言辞書の記述に基づく語彙的特徴(方言語彙 *vắn* 「短い」, *mắc* 「被る」, *dặng* 「できる・得る」の分布)から、本資料所収字喃の示す方言的特徴が、少なくとも現在の Thừa Thiên-Huế 省以南の特徴と合致することが明らかとなった。

桜井(1979)によると、景福寺境内の墓碑銘に記された檀家の出身地は、ベトナム北部出身者が 22 人、Nghệ An~Quảng Trị 身者が 14 人、Thừa Thiên 以南出身者が 12 人であり、一方、上記字喃の方言的特徴は現代ベトナム語南部方言の特徴とよく合うものである。今後、本資料群の製作者の問題、その歴史言語学的資料としての価値を考える上でも、さらなる学際的研究の成果が期待される。